

## Si vero musica/mathematica

### グロケイオ『音楽論』におけるアリストテレス主義

津上英輔  
藤田一美

#### 序

13世紀後期、パリで活躍した音楽理論家ヨアンネス・デ・グロケイオ (Johannes de Grocheio) の著作『音楽論 (De musica)』<sup>(1)</sup> は西洋の音楽観の流れの中で大きな転回点をなす。それは第一に、古代ギリシャで展開され、ボエーティウス (Boethius, ca.480-ca.524) によって整理されてラテン世界にもたらされた思弁的音楽観の伝統が、この『音楽論』ではじめて相対化され批判的考察の対象とされている<sup>(2)</sup> からであり、そして第二に、著者が「分類」の作業を通じて当時のパリにおける音楽実践に深く分け入っている<sup>(3)</sup> からである。ところでこの二つの新しさは、音楽という営みを、あくまでも耳に聞こえる出来事の範囲に限定するという、音楽概念の根本的変革に発している。そしてまさにこの変革こそが、中世までの思弁的・存在論的音楽観に対して、実践ないし現象だけを対象とする近代的音楽観を隔てる点に他ならない。上で「転回点」と述べたのは、そのような深い意味においてである。

このような見通しに立って『音楽論』の一節を見ると、テキスト伝承の問題が、中世後期の音楽論におけるアリストテレス受容の一断面として、予想外に重要な意味を帯びてくるのがわかる。小論では原則として視野を一節に局限して、そこに含まれる問題を掘り起こし、そこから若干の考察を引き出すことを試みる。<sup>(4)</sup>

#### 1. テキスト伝承

さて、まず当該箇所 (今後これをローロフの分節に従って、§33-34と呼ぼう) のラテン語原文を見なければならぬ。ローロフ版テキストでは次のようになっている。<sup>(5)</sup>

Adhuc autem, si consonantia sit naturalis, ex fine cognosci <potest>. Naturale enim potius ex fine demonstratur, ut ait Aristoteles <in> secundo Physicorum. Finis enim primo movet efficientem et ultimo complet opus. Si vero musica, eius cognitio sufficiens est per formam.

しかしながら、フラットも指摘するように<sup>(6)</sup>、この読みには編者の改変が大幅に織り込まれ、文意が大きく逸れている。そこで、ローロフ版に付されたファクシミリ版から、写本の伝えるところをまず忠実に見ておきたい。

この作品を伝える2つの写本のうち、Hと呼ばれる1300年より前の<sup>(7)</sup>写本 (Codex Herley 281, British Library), fol. 40<sup>r</sup> では次のように記されている。なお、下線は2つの写本間の不一致を示すため、筆者が付したものである。

Adhuc autem si consonantia sit naturalis, ex fine cognosci habet. Naturalis enim potius ex fine demonstrat. ut ait aristoteles secundo physicorum. finis enim primo movet efficientem, et ultimo complet opus, Si vero mathematica, eius cognitio sufficiens est per formam,

他方、1300年より後、1350年頃以前に書写された<sup>(8)</sup>D写本 (Codex 2663, Hessische Landesbibliothek, Darmstadt), fol. 57<sup>r</sup> b は次のような読みを伝えている。

Adhuc autem si consonantia sit naturalis in fine cognosci licet.<sup>(9)</sup> naturalis enim potius ex fine demonstrat ut ait aristoteles secundo physicorum finis enim primo movet efficientem et ultimo complet opus. Si vero musica. eius cognitio sufficiens est per formam.

なお、編者ローロフは両写本がしばしば共通の誤記を含み、かつ大抵同じ符号を用いていることを根拠に、両者が「同一の源泉から出たように思われる」としているが、資料価値の優劣については述べていない<sup>(10)</sup>。われわれとしてはex fine/in fine, habet/licet, mathematica/musicaのような食い違いを見せる両写本がいかなる意味で、またどの程度まで「同一の源泉から出た」と言えるのか、さらに資料自体としてどちらの写本を基本源泉とみるのか、という疑問を感じつつも、視野を、§33-34に限るという原則から、さしあたってはこれ以上源泉の問題には立ち入らず、ローロフの立場に準じ、両写本の価値を同等と見なしておくことにしたい。この前提に立つ限り、われわれは内容を解釈する上でできる限り整合的となるよ

うな読みを採用することが許されることになる。

その上ですで、両写本の伝える *naturalis ... demonstrat* (自然学者は... 証明する) を *naturale ... demonstratur* (自然的な事物は... 証明される) と変更するローロフの読みを見ると、その方が通り良くも見えるが、一つのセンテンスの二ヶ所も改変することには大きな問題があり、また *naturalis* が φυσικός (自然学者) の訳語として名詞的に用いられる例は、いわゆる *Translatio vetus* という版のラテン語訳『自然学』でも確認できる<sup>(11)</sup> から、この改変には必然性がないことがわかる。またローロフによる <potest> と <in> の補いや、写本同士で齟齬する *ex fine/in fine* および *habet/licet* のような語法上の細かな点については、両写本全体にわたる詳細な検討が必要であり、また内容に大きく影響することもないと思われるので、ここでは暫く措くことにしたい。それに対して *musica/mathematica* の箇所は、§33-34 の基本的な意味を決するばかりでなく、『音楽論』全体の思想史的位置づけをも左右する可能性がある。この問題は、両写本の資料的価値を同等と見なす以上、もっぱら内容解釈に依存する。しかしこの問題の吟味に入る前に、ここで予め結論を提示しておくのが便利であろう。われわれは結論として、フラット<sup>(12)</sup> の採った次の読みに基本的に賛同する。

*Adhuc autem, si consonantia sit naturalis, ex fine cognosci habet. Naturalis enim potius ex fine demonstrat, ut ait Aristoteles secundo Physicorum. Finis enim primo movet efficientem et ultimo complet opus. Si vero mathematica, eius cognitio sufficiens est per formam.*

## 2. 文脈の検討

内容解釈のはじめに、まず、§33-34のおかれた文脈を概観する。

音楽の原理 (*principia*) は *consonantiae* (ここでは仮に協和音程と訳しておく) および *concordantiae* とふつう呼ばれている (114,12-13)。ただしそれがいくつあり、それはなぜなのかを解明するのは音楽家 (*musicus*) のではなく (114,9-11)、哲学者の仕事である (114,38-39)<sup>(13)</sup>。ピュータゴラス、ニーコマコス、プラトーン、ポエーティウスらは協和音程が3つであることを数比によって示そうとした (114,22-34)。それに対して「アリストテレスの弟子達<sup>(14)</sup>」はそう考えなかった (114,34-35)。「ただし付言すれば (*adhuc autem*)」数比によって協和音程を説明しようとする論はいくつかの理由で破綻している (114,40-116,17)。著者はこのように述べ、そして、§33-34で協和音程が自然的な事物か否かを問うた後、「それゆえ

これらの理由により、またそれに類するその他多くの理由により、協和音程の数について根拠を提示することは困難であるように思われる」(116,23-24)と結論づけるが、他方ふたたび「試みに、これについて或る確からしいことを述べてみよう (Temptemus tamen aliquid probabile de hoc dicere)」と、慎重な論調で協和音程の根拠を神に求めてもいる (116,25-118,3)<sup>(15)</sup>。

この文脈から見る限り、グロケイオは音楽の原理たる協和音程が自然的物事であるか否かという、まさに存在の原理に関する考察について、§33-34で結論を下していないことが予想される。この予想を補強する材料をさらに示すなら、Si consonantia sit, ... Si vero [sit]の接続法は、単なる論理的可能性を表すであろうから、この言葉遣いからも、2つの考え方のどちらにも与しない著者の態度が見て取られるかもしれないし、また議論の本筋からの逸脱を表すadhucがこの周辺で5回文頭に繰り返されていることも見逃せない。『音楽論』全体を瞥見したところ、他の箇所では類例が見あたらなかった。

### 3. グロケイオのテキストとアリストテレスの所説との関係

次に、「自然学者」が「目的から認識する」とはどのようなことか。グロケイオが挙げるアリストテレス『自然学』第二巻(第八章)では自然の合目的性が説かれる中で「なおまた、自然というのに二義、すなわち質料としての自然と型式〔形相〕(μορφή=forma)としての自然とがあり、そして形相の方は終り〔目的〕(τέλος=finis)であって、その他はこの終りのためにであるからして、形相そのものは、その他のものどもがそれのためにであるそれとしての原因〔目的因〕(οὐ ἐνεκα=cuius gratia)であらねばならない<sup>(16)</sup>」とされ、したがって「自然学者は原因を両方も〔質料因をも目的因をも〕説明すべきであるが、ことに最も主として(μᾶλλον δέ=magis autem)目的を説明せねばならない<sup>(17)</sup>」と述べられる。ここに出現するμᾶλλονは、ふつう「むしろ」とでも訳される比較を表す語で、Translatio vetusではmagisと訳されているが、グロケイオがここで用いているpotiusと同義である<sup>(18)</sup>。

このように、§33-34の前半部分はここに引いたアリストテレスの論述を踏まえていると考えて間違いない。問題は最後の一文であるが、「十分である(sufficiens)」という表現に注目したい。なぜならこの表現は、或る別のものが必要でないことを含意するからである。それは<形相>と対をなすもの、すなわち<質料>と考えるのが順当であろう。そして、質料抜き形相だけを通じて十分に認識される対象そしてその認識そのものとは、数学に他な

らない。事実、アリストテレスは『自然学』第二巻第二章で「数学者が自然学者とどう異なっているかを考えねばならない」(193b23, 出・岩崎訳, pp. 49-50)と、まさにこの問題を主題としている。すなわち、「数学者もまたそれら[点や線や面や形など]の研究をその仕事としはするが、... それらを[その付帯するところの物体から]切り離している( $\chi\omega\pi\iota\zeta\epsilon\iota$ =abstrahit)」(193b31-34, 出・岩崎訳, p. 50)と言うが、この「切り離し」とは、自然的事物が「質料( $\delta\lambda\eta$ =materia)をぬきにしては定義され」(194a14, 出・岩崎訳, p. 51)ないと言われるように、まさに形相と質料の切り離しである。しかも数学的研究の場合、対象は「切り離されても[その推理に]なんのまちがひも起こらず、[結論に]なんの虚偽も生じない」(193b34-35, 出・岩崎訳, p. 50)。したがって、数学は対象の形相を研究するだけで十分であることになる。

ここまで来れば、2つの写本の伝える読みのうち、*musica*と読むことに資料上の必然性が認められない以上、*mathematica*が採られるべきことは文脈上明白である。

#### 4. 文法・語法の検討

ここで、文法ないし語法の面からあらためてこの問題を吟味してみよう。§33-34では *si consonantia sit naturalis ... si vero mathematica/musica ...* と、2つの条件節が対比されていた。つまり第2の条件節では *mathematica/musica* が主語または述語のいずれかであり、残りの述語または主語が省略されている。そこで問題は、*mathematica/musica* が主語ないし述語でありうるか、そしてそれぞれの場合どのような意味をなすか、である。

まず、*mathematica/musica* のいずれもが名詞として主語に、そして名詞ないし形容詞として述語に立ちうることは、文法的には何の問題もない。語法としては、主語にせよ述語にせよ、名詞と見る限り類例が『音楽論』に見られる。形容詞的用法もローロフ版の語句索引から確かめられる<sup>(19)</sup>。したがって文法・語法上は *mathematica/musica* のいずれもが主語または述語であり得る。

次に論理関係として見ると、文脈の検討の節で見たように、この前後では *consonantia* の範疇づけが問題にされていた。それゆえこの§33-34で、*naturalis* という同じ述語に対する主語 *consonantia* と別の主語(つまり *mathematica/musica*) との対比が取り上げられるのではないことが、まず予想される。事実、*mathematica* の読みを採りそれを主語と取ると「数学が自然(学)的であるならば」という意味になって、いかにも唐突の感を免れないし、*musi-*

caの読みを採りそれを主語と取ると「音楽が自然（学）的であるならば」となって、veroによって結ばれたconsonantiaとの対比関係が不明になる。したがってmathematica/musicaは述語であり、それがveroによって形容詞naturalisに対比されている以上、形容詞と取るべきである。その場合、省略された主語は当然consonantiaである。このように、文法・語法上そして論理関係上、mathematicaを採用することを妨げるものはない。

なお、古文書学的に見ても、H写本とD写本はそれぞれma<sup>ca</sup> (mathematica) と mu<sup>ca</sup> (musica) という略記法を用いており、D（系統）の筆写人が内容を把握しないまま、音楽論たる本書において、直近に類例のないma<sup>ca</sup>の語を、なんらかの理由から1字だけ入れ換えてmu<sup>ca</sup>という頻出語に書き替えた（または書き誤った）と考えることができよう。逆にma<sup>ca</sup>の語をあえてmu<sup>ca</sup>に書き換える理由は乏しいと思われる。

ところで、Si vero [consonantia sit] mathematicaにおいて、主語と動詞がともに省略されるのは語法上無理がありはしないか、という疑問が残るように思われるかもしれない。しかし次に見るように、この切り詰めは内容的に見る限り、必ずしも不自然ではない。

## 5. 当時のアリストテレス注釈における「中間にある学」

フラットによれば、13世紀のアリストテレス主義 (Aristotelismus) において、音楽は自然学と数学の中間にある学と考えられていた<sup>(20)</sup>。彼女の挙げる例を参考に、ここにアリストテレス『自然学』第2巻第2章194a7-12への2つの注釈を見る。

まず、アリストテレスは次のように述べている。「だが、さらにこのことは数学的学科のうちでより多く自然的な学科、たとえば光学、和声学<sup>(21)</sup>、天文学など、によっても明らかにされる。というのは、これらの学科は、幾何学に対して或る仕方では逆な関係になっているからである。すなわち、幾何学の方は自然的な線を研究しはするが、これを自然的なものとして研究してはいない、これに反して光学の方は数学的な線を研究してはいるが、数学的なものとしての線をではなく、自然的なものとしての線をであるから。」(出・岩崎訳, pp. 50-51.) これに関してまず、アヴェロエス (Averroes, Ibn Rushd, 1126-1198) の注釈を見よ

う。

Et declarabitur quod in definitionibus naturalibus apparet materia ex hoc, quoniam quod de mathematicis est propinquius scientiae naturali magis pertinet ad materiam, et magis apparet

materia in difinitionibus eius: licet minus appareat quam in scientia Naturali: vt in scientia de Aspectibus, et Musica, et Astrologia. Et dixit quodammodo. quoniam illa, quae sunt in hoc in conuersa dispositione Geometriae simpliciter sunt definitiones scientiae naturalis. Geometria enim consyderat de magnitudinibus abstractis à materia, Naturalis vero consyderat de eis secundum quod sunt in materia, Aspectiuus autem consyderat de lineis in dispositione media inter illas duas consyderationes: non enim consyderat de linea secundum quod est linea simpliciter vt Geometer: neque secundum quod est linea ignea, aut aerea vt Naturalis: sed secundum quod visualis: istud enim esse est quasi medium inter naturale, et mathematicum. Et similiter Musicus consyderat de proportionibus numerabilibus, non secundum quod sunt proportiones numerabiles, sed secundum quod sunt sonorum sensibilium. Et ideo, cum dixit Aspectiuus autem consyderat de linea mathematica non secundum quod est mathematica, sed secundum quod est naturalis, non debes intelligere quod consyderatio eius est consyderatio naturalis, sed intendebat quod consyderatio eius est propinquior consyderationi naturali.

そして自然学的な定義において質料が現われるのは次の理由からであることが明らかになるであろう。というのは、数学的諸学科よりは自然学に一層近い学科は質料にかかわることが一層多いからであり、その定義には質料が一層多く現われるからである。ただし自然学 [そのもの] においてよりは、質料が現われることは少ない。[そのような学科とは] たとえば見ることについての学 [光学]、音楽、天文学である。そして [アリストテレースが] 「或る仕方では」と言ったのは、この点で幾何学と端的に反対の位置にあるのは、[そのような学の、ではなく] 自然学 [そのもの] の定義だからである。実際、幾何学は質料から切り離された大きさについて考察し、自然学者は質料の中にある限りでの大きさについて考察するのに対して、光学者は上の二つの考察の中間の位置で線を考察する。というのは、光学者は幾何学者がするように端的に線としての限りで線を考察するのではなく、また自然学者がするように木の線や銅の線としての限りで考察するのでもなく、目に見える線としての限りで考察するのである。というのもその [目に見える線としての] 存在は自然学的存在と数学的存在のいわば中間のものだからである。同様に音楽家は数比について、数比としての限りで考察するのではなく、感覚されうる音の数比としての限りで考察する。それゆえ、アリストテレースが「光学者は数学的な線について、数学的な線としての限りで考察するのではなく、自然的な線としての限りで考察する」と述べるとき、光

学者の考察が自然学的考察であると理解すべきではなく、アリストテレスは光学者の考察が自然学的考察のほうに一層近いということを言いたかったのである<sup>(22)</sup>。

ここで、アヴェロエスが協和音程を光線と同様、数学的存在そのものでもなく、また自然学的存在そのものでもない、両者の中間的存在として措定していることが確認できる。また、中間的存在を自然学的存在から隔てる差として、質料そのものとは区別された感覚性 (*visibilis, sensibilis* = 協和音程に即して言えば「耳に聞こえる」こと) が立てられている点も重要である。

次にトーマス・アクィナス (Thomas Aquinas, 1224/5-1274) は、遅くとも1271年には完成していた『自然学』注釈<sup>(23)</sup>において、その点についてさらに踏み込んだ解釈を示している。彼は『自然学』の同じ箇所について次のように述べている。

Deinde cum dicit: *Demonstrant autem etc.*, probat idem per scientias quae sunt mediae inter mathematicam et naturalem.

Dicuntur autem scientiae mediae, quae accipiunt principia abstracta a scientiis pure mathematicis, et applicant ad materiam sensibilem; sicut [...] et *harmonica*, idest *musica*, applicat ad sonos ea quae arithmeticus considerat circa proportiones numerorum. [...]

Huiusmodi autem scientiae, licet sint mediae inter scientiam naturalem et mathematicam, tamen dicuntur hic a Philosopho esse magis naturales quam mathematicae.

次に、アリストテレスが「だが、... 明らかにされる」[19a7-8]と言うとき、彼は数学と自然学の中間にある諸学によってそのことを示しているのである。

ところで中間にある学と呼ばれるのは、純粋数学的な諸学から切り離された原理を受け取り、感覚されうる質料にそれをあてはめるような諸学のことである。たとえば [中略] 調和論すなわち音楽も、算術家が数比について考察したことを音にあてはめる。[中略]

ところでこのような学は自然学と数学の中間にありはするが、哲学者がここに述べるように、数学的であるよりはむしろ自然学的なのである<sup>(24)</sup>。

しかし少し後では (n. 165)、音楽と並んで「中間にある学」の一つとされる天文学が「純粋に自然学的ではない (*non est pure naturalis*)」とも述べられる。したがって、トーマスにおいて音楽は、数学、自然学のいずれにも完全には吸収されない、いわば第三の項として立

てられていたと解釈することができよう。 *Dicuntur autem scientiae mediae* という言い回しは、この範疇が当時或る程度一般に受け入れられていたことを示唆するかもしれない<sup>(25)</sup>。さらに進んで、彼は協和音程そのものを取り上げている。

*Et ponit exemplum in quadam consonantia musicae quae vocatur diapason, cuius forma est proportio dupla, quae est duorum ad unum. Nam proportiones numerales applicatae ad sonos sicut ad materiam, consonantias musicales constituunt.*

アリストテレースはディアパーソン [オクターヴ] と呼ばれる或る協和音程を例に取っている [194b27-29]。この音程の形相は2倍の比つまり2:1の比である。というのは、質料としての音にあてはめられた数比が協和音程を構成するからである<sup>(26)</sup>。

アヴェロエスが感覺性を質料と形相の中間の存在と特定したのに対して、トーマスはその点に触れていないものの、彼が協和音程を < 質料-形相 > の関係の中に位置づけ、自然学と数学の「中間にある学」の対象と考えていたことは、この2つの引用から明らかになった。なお、本稿の目的からはいささか逸脱するが、上に挙げたアヴェロエスとトーマスの注釈の中で、それぞれ「中間にある学」が「数学的諸学科よりは自然学に一層近い」あるいは「数学的であるよりはむしろ自然学的」と言われていたことについて、一言注釈しておきたい。アヴェロエスの文中、『自然学』194a7-8の訳そのものと思われる *quod de mathematicis est propinquius scientiae naturali* において、*de* は部分 (... の中で) よりはむしろ分離点 (... から離れて) ないし端的に比較対象 (... よりは) を意味すると考えられる。なぜなら、この文と内容上平行する上掲引用部最後の一文で、彼は「自然学的考察のほうに一層近い」と述べているが、ここでは数学は対比の対象であって「中間にある学」を包摂する関係は考えられないからである。トーマスの場合、明確に比較が語られている。

ここにはおそらく『自然学』のラテン語訳の問題が介在する。ギリシャ語原文 *τὰ φυσικώτερα τῶν μαθημάτων* において、属格 *τῶν μαθημάτων* は上の出・岩崎訳のように部分属格と取り、それが狭義の数学とは違ってやや曖昧な「数学的諸学科」を意味すると解釈するのが妥当であろうが<sup>(27)</sup>、トーマスの基づくラテン語訳ではその曖昧さを嫌ってか、明確に比較対象の属格と解し、アヴェロエスの注釈も上述のように、ラテン語として見る限り同様である。部分属格と取った場合、この前後の箇所はロスによれば、「天文学が(光学や調和論と同様に)通常、数学の諸分野のうち特に自然学的な分野と見なされているが、実際は自然学

の一分野であると述べているに等しい<sup>(28)</sup>。とすれば、アリストテレス原文ではあくまでも数学対自然学の二項対立の枠組みで語られていると理解されるのに対し、これらのラテン語訳では「数学的諸学科よりは自然学に一層近い」あるいは「数学的であるよりはむしろ自然学的」と言う以上、光学や調和論が狭義の数学でもなければ、かといって自然学そのものでもない、何か中間的存在であることが必然的に要請されてくる。アヴェロエスやトーマスはこれらを「中間にある学」と呼び、より踏み込んだ解釈を与えていると考えられる。なお、前出のアヴェロエス注釈に付された2つのラテン語訳『自然学』のうち、ローマン体で最初に印刷された版ではこの箇所は *quae ex Mathematicis magis Physica sunt* とされ、ギリシャ語原文に忠実である。したがってこの箇所に関する限り、トーマスはこの訳版に基づいてはいない。

## 6. グロケイオのテキストとアリストテレス主義との関係

中世後期の知的環境において、「学生あるいは学問的素養を積んだ読者の誰もが、術語が挙げられた途端に、それとともに示唆される文脈を補い、併せ考えることができた」<sup>(29)</sup> ののは確かであろうし、グロケイオの時代のパリ大学でアリストテレス哲学は中心の位置を占めていた<sup>(30)</sup> のであるから、ここでグロケイオが協和音程について、前節で見たような議論を背景として、*naturalis/mathematicus* の対立を前提としていても不思議はない。まして彼は、それがアリストテレス注釈者たちに問題とされた『自然学』第二巻を直前の箇所で見ているのである。

以上のような傍証をもって、われわれは *Si vero [consonantia sit] mathematica* という用語法が、少なくとも思想内容上は不自然と見るに当たらないと考える。

さらにわれわれは次のことにも注意を喚起しておきたい。それは彼がここで協和音程を *naturalis/mathematicus* のどちらであるとも言っていないことである。つまり彼は、プラトーンやピュタゴラス派によって確立されボエティウスによってラテン世界にもたらされた数学的音楽観にも、アリストテレスその人の自然学的立場にも与していないわけであるが、このことはしかし、上に見たようなトーマスらの当時最新のアリストテレス理解には叶っていたのである<sup>(31)</sup>。

それを確認するため、問題の箇所に視野を限るという前提には反するが、少し後の議論を見ておきたい。122,8-14に現われる音楽の定義の中で、グロケイオは音楽を *ars* と *scientia* の両面に分けて論じ、音楽は *scientia* としての限りで「諸原理の認識を提供する」が、その際

「固有の質料 *materia propria*」は音であり、その形相が数であるとされる。したがって、音楽の対象たる「数に則し調和的に取られた音 *sono numerato, harmonice sumpto*」とは、言い換えれば数という形相に音という質料をあてはめたものに他ならない<sup>(32)</sup>。これと、先に引用したトーマスの解釈との一致は顕著である。このように、彼は一方でアリストテレスに忠実に、理論の枠組みを自ら構築することを避けながら、他方定義という実践的な場面においては、(現代のわれわれの理解する)アリストテレスから離れ、当時のアリストテレス主義に依っているのではないかと推定することができる。無論、彼自身がそのことを方法的に意識していたという意味ではない。

ただし、*mathematica* の読みを採り、それによってグロケイオの発言とアリストテレス(主義)との関係がより明らかになったとしても、*naturalis* — *finis* : *mathematica* — *forma* の対比がうまく噛み合っているかどうかという疑問はなお残る。言うまでもなく目的因は<形相+質料>の結合体と完全に重なり合うわけではないからである。このことについてアリストテレス自身がどう考え、13世紀後期のアリストテレス注釈者たちがどう理解していたかは、究明すべき課題ではあるが、さしあたり本論では断念せざるを得ない<sup>(33)</sup>。

## 7. 日本語訳

さて、これまでの議論を通じてわれわれはようやく問題箇所の日本語訳を提示するところにたどり着いた。

「ただし付言すれば、もし協和音程が自然的事物であるならば、協和音程は目的から認識されうる<sup>(34)</sup>。というのは、アリストテレスが『自然学』第二巻で述べるように、自然学者はむしろ目的から証明するからである。実際、目的がはじめに、作り出すものを動かし、最後に仕事を完成させるのである。しかしもし[協和音程が]数学的事物であるならば、その認識は形相をつうじて<sup>(35)</sup>十分になされることになる。」

## むすび

さて、以上のことはわれわれに何を教えてくれるだろうか。たったひとつの段落に限って

ではあるが、テキストをいくつかの面から吟味することにより、『音楽論』全体に通じるかと思われる事柄が浮かび上がってきたように思う。それが実際に妥当するかどうかは作品全体の綿密な検討に待つほかはないが、この段階で次のことを一つの方向として示しておきたい。

グロケイオの論述にはアリストテレス哲学そのもののみならず、とりわけトーマスのアリストテレス注釈と響きあうところがあった。このことは、思想史上、アリストテレス主義が音楽にまで及んだ例として重要なだけではない。それは音楽の側から見て、音楽論がボエーティウスの自由学芸の枠組み<sup>(36)</sup>を脱して同時代の哲学の潮流に取り込まれ、それを通じてそれまでとは別種の理論的基礎づけを得たことをも意味する。そして『音楽論』は、ボエーティウスの「三つの音楽 (musica mundana, m. humana, m. instrumentalis)」の論を否定し、考察の対象を、耳に聞こえる協和音程からなる、耳に聞こえる音楽に限定する<sup>(37)</sup>という理論的前提に立ってこそ、当時の音楽実践について生き生きとした描写を行うことができたのである。この近代的とも見える態度が、他ならぬアリストテレス主義の継承においてもたらされたことを見逃すわけには行かない。

ただし、先に文脈の検討の中で見たように、グロケイオは協和音程原理の積極的根拠づけを避けながら、したがってアリストテレス哲学の大きな枠組みを受け入れながら、別に音楽的なものの存在の最終的根拠を神に求める考えも示している。つまり彼においては、キリスト教の信仰とアリストテレス哲学はいわば両論併記の形にとどまり、理論的な調停を見ていない。しかもその注意深い留保的論調は、著者がこの未調停を明確に意識していたことをうかがわせる。原理究明に対するこの慎重な態度、これもアリストテレス哲学的方法的側面であるに違いない。

彼以前あるいは以後の音楽論において、これほど厳密な方法意識をもって音楽そのものの、主体との関係ではない、また機能や構造でもない、客観的原理の解明が試みられたことは、稀なのではなからうか。

## 註

- 九  
—
- (1) Ernst Rohloff, *Die Quellenhandschriften zum Musiktraktat des Johannes de Grocheio: Im Faksimile herausgegeben nebst Übertragung des Textes und Übersetzung ins Deutsche, dazu Bericht, Literaturschau, Tabellen und Indices*, Leipzig: VWB Deutscher Verlag für Musik Leipzig, s.d. (1972), pp. 171f. は1275年頃に成立したとしている。なお、以下『音楽論』のテキスト箇所はこの版のページづけと行数によって表示する。
  - (2) *De musica*, p. 122, 27-35.

- (3) *Op. cit.*, p. 122,35 以下すべてがこれにかかわると言ってよい。
- (4) この論はそもそも、中世・ルネサンス音楽史研究会の皆川達夫教授から、以下に問題とする箇所  
の解釈に関して寄せられた質問に触発されたものである。きっかけを与えて下さった皆川先生に感謝  
したい。
- (5) *Op. cit.*, p. 116, 18-22.
- (6) Ellinore Fladt, *Die Musikauffassung des Johannes de Grocheo im Kontext der hochmittelalterlichen  
Aristoteles-Rezeption*, München /Salzburg: Musikverlag Emil Katzbichler, 1987, p. 43.
- (7) Rohloff, *op. cit.* p. 172.
- (8) *Ibid.*
- (9) ローロフ (*op. cit.*, p. 116) は校訂注で誤って *habet* と報告している。
- (10) Rohloff, *op. cit.*, p. 172.
- (11) *Aristoteles latinus*, VII 1.2, *Physica*, Fernand Bossier et Jozef Brans, edd., Leiden/New York: E. J.  
Brill, 1990 の、たとえば第2巻第2章冒頭。編者によれば、この訳は1180年頃より前に完成した。  
アヴェロエスの『自然学』注釈 (たとえば『自然学』同箇所についての注釈=comm. 16) や、トーマ  
ス・アクィナスの『自然学』注釈 (たとえば典型的な例として I, lect.8, 53) でも同様である。な  
お、フラット前掲書 p.44 も参照のこと。
- (12) *Ibid.*
- (13) これはアリストテレス『自然学』第二巻の次の言葉と響きあっている。「だが、[資料から] 離れ  
て存するもの (*τὸ χωριστόν*=*haec separabilis*) [としての形相] がどのように存在するか、またそ  
のなにであるか [その本質] について定義することは [自然学の仕事ではなくて] 第一の哲学  
の仕事である。」(第二章 194b14-15. 出隆・岩崎允胤訳, 『アリストテレス全集』第3巻, p. 53.  
強調と [] の補いは訳者, 原語とラテン語訳の補いは筆者。ラテン語訳は上掲の版による。以下の  
引用文も同様である。)
- (14) その代表は言うまでもなくアリストクセノスである。しかしアリストクセノス派の考えは全く取り  
あげられない。念のため注意を促せば、われわれが問題とする§33-34での一方の立場である「協和  
音程=自然的事物」の考えは、この「アリストテレスの弟子達」とは何の関係もない。
- (15) それは、協和音程が3つしかないのはなぜかという問題と、協和音程を認識するのが人間だけであ  
るのはなぜかという2つの問題にかかわる。グロケイオは前者には三位一体をもって答え、後者に  
は「人間靈魂が... 創造者の姿ないし似像を (*speciem vel imaginem*)」保っているからだと述べる。  
グロケイオにおける神学がいかなるものであるかは判然としませんが、少なくともトーマス・ア  
クィナスの影響を受けていることが予測される。なお、自分の解釈を示す際の「(次のように) 言  
おう (*dicamus*)」(116,28; 116,42), 「おそらく (*forte*)」(116,33; 116,39; 118,1) という留保にも注  
意したい。
- (16) 199a30-32. 出・岩崎訳, p. 76.
- (17) 第九章 200a32-33. 出・岩崎訳, p. 81.
- (18) グロケイオがどの版のラテン語訳に依拠していたのかは、今のところ不明である。
- (19) ただし *mathematica* については 114,25 で H 写本だけがこの語の形容詞的用法を伝えている。
- (20) Fladt, *op. cit.*, p.153.
- (21) この日本語はふつう和音の連結法を指すから、少なくとも、多声的でなかったと考えられる古代ギリ  
シャの音楽にはふさわしくない。そもそも *ἀρμονία* とは、音楽的に、<sup>か</sup>節ないし旋法から、存在論  
的に、諸物の<調和>へと至る連続的な意味のスペクトルをなす。その前提に立つてこそ、古代

とそれを引き継いだ中世の音楽観は存在論的であり得たのである。本稿ではさしあたって「調和論」という訳語を採用しておきたい。なお、津上英輔「ブトレマイオスの宇宙調和論：4つの音高概念」（『音楽学』29, 1983年, 63-75頁）はこの問題にかかっている。

- (22) *Aristotelis de Physico auditu libri octo cum Averrois Cordubensis variis in eosdem Commentaria*, Venetiis, 1562, lib. II, comm. 20, p. 55H-L. なお、フラットは、アヴェロエス注釈と共に上掲書に印刷された2種のラテン語訳『自然学』の一方（先にローマン体で掲載されているもの）が、トーマスの注釈の前提となった版であると述べているが（Fladt, op.cit., p. 9）、今回そのことを確認することができなかった。註24に挙げるトーマス注釈の版に印刷されたラテン語訳『自然学』は Editio Leonina のものを引き継ぎ、したがってルネサンス時代のものである。本稿で『自然学』のラテン語訳として、現在のところ最も素性の確かな *Translatio vetus* を採用したのもそのためである。
- (23) Albert Zimmermann, *Ein Kommentar zur Physik des Aristoteles: Aus der Pariser Artistenfakultät um 1273*, Berlin, 1968, p. XIV. なお、*Commentary on Aristotle's Physics by St. Thomas Aquinas*, tr. by Richard J. Blackwell, Richard J. Spath and W. Edmund Thirlkel, introd. by Vernon J. Bourke, London: Routledge & Kegan Paul, 1963, p. xxi では、同書の完成が1268-1269年と推定されている。
- (24) Thomas Aquinas, *In octo libros Physicorum Aristotelis expositio*, P. M. Maggìolo, ed., Torino/Roma: Marietti, 1965, II, lect.3, n.164, p. 84.
- (25) Fladt; *op. cit.*, pp.154f. はそのことを歴史的にさらに裏付けている。
- (26) Thomas, *op. cit.*, II, lect.5, n.179, p. 92.
- (27) 出・岩崎訳の他、W. D. Ross, *Aristotle's Physics*, Oxford, 1946, p. 507や W. Charleton, *Aristotle's Physics, Books I and II*, Oxford, 1970, p.26 も同様である。
- (28) Ross, *loc.cit.*
- (29) Fladt, *op. cit.*, p.14.
- (30) *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, s.v. Aristotelismus. なお、Zimmermann, *op. cit.*, pp. XIII-XV によれば、同書で編集された『自然学』注釈はトーマスのものを踏まえて1273年頃にパリ大学の教養課程で公にされた。
- (31) Fladt, *op. cit.*, p. 44 は、グロケイオがここでアリストテレス主義者（Aristoteliker）とも袂を分かっていると述べるが、それは間違っている。
- (32) 少し前には「彼らは音楽が音に関係づけられた数（*de numero relato ad sonos*）であると述べている」（120,44-122,1）という言葉が見られる。この考えの主たちの中にトーマスが含まれることは、用語の一致からしても疑い得ない。
- (33) 『自然学』第2巻第3章195a24-25（出・岩崎訳「けだし、他の物事がそのためにならざるやと云ふ所のそれは最も善なるものであり、他の物事の最終目的であるのが常例だからである」）に関するトーマスの注釈に、「目的因は他の諸原因の原因である（*est enim causa finalis aliarum causarum causa*）」という一節がある（II, lect.5, n.186）。これは目的が一連の事物の因果系列において終極点にあることを述べるアリストテレス本来の意図から大きく離れるものである。我々の問題とする『音楽論』の§33-34において、「*primo ... et ultimo*」という言葉が目的因の包括性を言うものだとすれば、このトーマスの考えと通じるところがあるかもしれない。少なくとも、次の「形相だけで十分である（*sufficiens est per formam*）」という言葉遣いとはよく符合する。ただし言うまでもなく、ここから直ちに影響関係のようなものを語ることはできない。
- (34) *ex et cognoscere* の結びつきは、*'aetatem eorum ex dentibus cognoscere* 歯から年齢を認識する

(Varro, *De re rustica* 2,8 fin.)' のように古典的である。

- (35) たとえばグロケイオとはほぼ同時代のロジャー・ベイコンの 'veritas simplicium non cognoscitur ... nisi per experimentum 単純な事象の真理は経験をつうじてしか認識されない (Roger Bacon, *Opera hactenus inedita*, ed. R. Steele et al., IX 105=*Antidotarius*)' のような用例がある。
- (36) *Septem artes liberales* の中で理数系の *quadrivium* に音楽が位置づけられる。その根拠は言うまでもなく、協和音程の数比関係にある。
- (37) いわゆる天体の音楽の観念の否定には、『天体論』第2巻におけるアリストテレスの議論が引き合いに出されている (122,30-32)。